

復讐ノ学ビ舎

傍若無人なお嬢様への恨みは全てその身へ帰ってゆく。

先行
体験版

本編制作中の先行体験版になります。
内容が変更になる場合がございます。
あらかじめご了承下さい。

企画制作 雑草製作所
illustration | 九十九沢ガリマヨ

学校歌

作詞作曲
Ficktomy·Ugeesatwo

遙か大海をのぞむ櫓の庭に昇る朝陽

清らけり精神を高く掲げ

先達の刻みし歴史を胸にしのび

気高き丘より明日を見て

あゝ 我らが母校 大志を抱かん

学舎

一種の聖域であり、あらゆる問題を抱えつつも
その性質上表世間に露呈しにくい事柄が多々ある。
昨今ではSNS等で当事者自ら発信する者も多く、
そこから発覚することもありはするが、
それでもメディア等によって白日に晒されるものは氷山の一角である。

戦前より続く名門であるこの学舎も例外でなく――

これはいつか、どこかで行われていた
闇に葬られたはずの“聖域”での記録。

ひのしずか
日野 静

比較的新しい商社を経営する家に生まれた彼女は、その立場上、世話になっている周防家に刃向かうことは出来ません。周防ナタリー。彼女の性格との相性は良くなく度々、おもちゃのように気まぐれに遊ばれてしまいます。しかし、最近ではそれもエスカレートしており……



すおう
周防 ナタリー

財力とそれに伴う権力にものを言わせ、学園では好きに振る舞う本作の問題児。曾祖父の代に世界展開し数多の事業を手がける家に生まれた。父親もそれを受け継ぎ、比類なき手腕を持つ実業家である。この学舎への寄付金もかなりのもので学園長や経営陣ですら彼女に強く出ることはない。

「ネクラ、スカート捲って」

「えっ」

「早くッ」

「はっはっ…」



とある日、いつものように授業が終わり
教室を出ようとした私は
周防さんに呼び止められました。

入学当初は気さくに接してくれた彼女でしたが、
私の苗字から父の事業を知ると次第に私への当たりが厳しくなりました。
出会ってから1年も過ぎた頃にはすっかりしもべのような扱いとなり、
しかし私の父の経営する会社は彼女の家の援助なしには成り立たず、
彼女に逆らうことは出来ない状態となっていました。

それ以前は買物に使わされたり、髪を引っ張られる程度でしたが
徐々に徐々に恥ずかしい要求も増していきました。
とは言え、私にはどうすることも出来ず……
またこの学園も彼女の家よりの援助金の額がゆえに
彼女へ手を下せないことはわかっていました……

「……これでいいでしょうか」

「……なにその態度？」

「いえっ、別に怒らせようとしたわけでは」



望めばなんでも手に入るそんな環境が
彼女をこうして意味のない暇つぶしに
駆り立てていたのでしよう。

「つまらない下着」

「男どもは喜んでるみたいだけど」



A close-up illustration of a person's lower body. They are wearing dark brown or black shorts and purple underwear. Their hands are pulling the waistband of the shorts down, revealing the underwear. The person's legs are fair-skinned and have a slight sheen. The background is dark and indistinct.

それでも、男の子たちも見ている前でこれには堪えました……

「キモデブ！
お尻でも揉んでみる？」

「!!」

キモデブ——

そう呼ばれたのは同じクラスの新道くんです。

新道くんは学力で入学した言わば叩き上げ……

と、将来そう云われることとなるであろう一般家庭の出身でした。

私と同じく内向的な性格からか、周防さんの持つ生まれ持つ風格からか

彼もまた彼女には逆らえない者の一人でした。

でも——

「新道くん……や、やらないよね？」

「ゴメン…日野さん、僕も周防さんには…」

そう……そうでしょう。

誰もあのお嬢様、周防ナタリーには逆らえない……
それがこんな下らない命令であっても……

鼻息が首筋をなぞり

彼の手が徐々に近づいてくるのがわかります。

ゾクゾク

(気持ち悪い……)

(ごめんなさい。新道くん……)

(彼もまた被害者だということだ)

最初はプルプルと震えていた手も
すぐに堂々とお尻を伝い、

もいっ?



汗をかいているのか手は滑りが悪く
じとじとしてん

正直なところやはり——

(気持ち悪い)



「ず、周防さん。もっもう……？」

周りの男子もただ静かに見守っているようでしたが
チラッと見えてしまったうちの一人の股間が……
その、膨らんでいるようにも見えました。

「……そろね、つまんないわ」

「キモデブ、やめ！」

新道くんもそうだったのでしょうか……

(気持ち悪い)





考えるのもおぞましいですが
これが私の日常でした。

そう、あの日が来るまでは――

「脱いで」

「なんでこんなこと」

「実験よ。知的好奇心」



ただの暇つぶし

立場上逆らえない存在を使って

ただただ遊んでいるだけなのです、このお嬢様は。

そこにはほんの少しの意味もなく

私はただ弄ばれるだけの存在でした。

「実験？」

「そっ」

「バカな男ども。あなたの裸を見て興奮していたでしょう？」
「教室であれなら世界規模ならどうなのかなって」

「！」

「こんなネクラの裸でも興味津々な

男どももいるわけでしょう？」

「その拡散規模を調べるの。」

興味と伝播の速度を計測して私の事業に
活かすため礎となりなさい」

「そ……そんな……」

口からでまかせでよく言えるものです。
ただこの時、私は悔しさで泣くばかりで何も出来ない。
そんな惨めな存在でした。

「キモデブ！ ぐらつかないっ!!」
「あんた椅子の役目すら
まともに行きえないわけ？」

新道くんもまた——
お手洗いの床で椅子がわりにされ、
何も言えずそれに従うだけ。

「早く」

……!!

本当につまらなそうな一言。

放課後の暗いお手洗いで私と同じように自分の意思では動けない取り巻きたち。

あいつらは自分が標的じゃないのを良いことに周防ナタリーに従うだけ。



だってそうですよ。

あのお嬢様の手足となっていれば

私と同じ目にあうことは無いのだから。

だから楽しそうにケラケラ笑うだけ。

「下着も」

わかっています。
わかっています。
わかっています。

「自分で出来ないみたいだから脱がせてやって」

わかっていても体は動かない。
そこでただ椅子としての役目
を与えられた新道くんもそう
なのでしょうか。



「あは」

結局取り巻きたちに下着も剥がされてしまいました。

ただそこのお嬢様の機嫌をとるために「汚い」だの「やあねえ」だの。

あなたたちの大演技、大好きなお嬢様には全然響いていないようでしたよ？

けれど私だってその子たちと同じ。

この時はただただその状況に従うだけ……

「それじゃあ撮ってアップして」

作られた機械的なシャッター音が何回も響きます。

私にとっての大事はこの方にとっては日常のつまらない
二コマに過ぎないご様子で。

適当に作られた私の裸をばらまくだけのアカウント
いくつあるのかなあ？

ただ冷静にそんなことを考える余裕だけはある私が
嫌になりました。

数分間、私はただ裸で耐えるだけ。

どうしてこんなことしているのだろうかと思うだけ。

その時――

初老の男性教諭。

この学園の校内責任者。

見回りをしていたのでしよう。

全寮制のこの学園。

この時間に残っている生徒はいないはずですからね。

わかっています。

彼の驚いたような表情が私の目にしっかり映りました。

わかっています。

学園長はこの現場を目の当たりにして発します。

「すおっ! あー…今日はもう遅いから」

その目はしっかり周防ナタリーの…このお嬢様を捉えていました。

「な、仲がいいのは結構ですが、もう寮へ戻るように」

「なあにあれ?」

ドアが閉まり静まり返ったお手洗いの中、

取り巻きたちのサーッと血の気の引いたような雰囲気は
しかと伝わっていました。

変わらないのは私と新道くん。そして退屈しのぎの中、

退屈しているこのお嬢様だけ。



その夜

私はさすがに泣きました。

ひたすらに泣き、

泣き疲れてどれくらいの時間が経ったか――

電話を手を取っていました。

夜中にも関わらず、すすり泣き、なかなか話し出せない私を
じっと待つてくれたお父さん。

いざ話し出してもゆっくり優しい声で頷いてくれたお父さん。

そして学園への抗議の提案を持ち出したとき

私はそれを遮りました。

それだけはいけなかったのです。

私だけの問題では無い、父だけの問題では無いから。

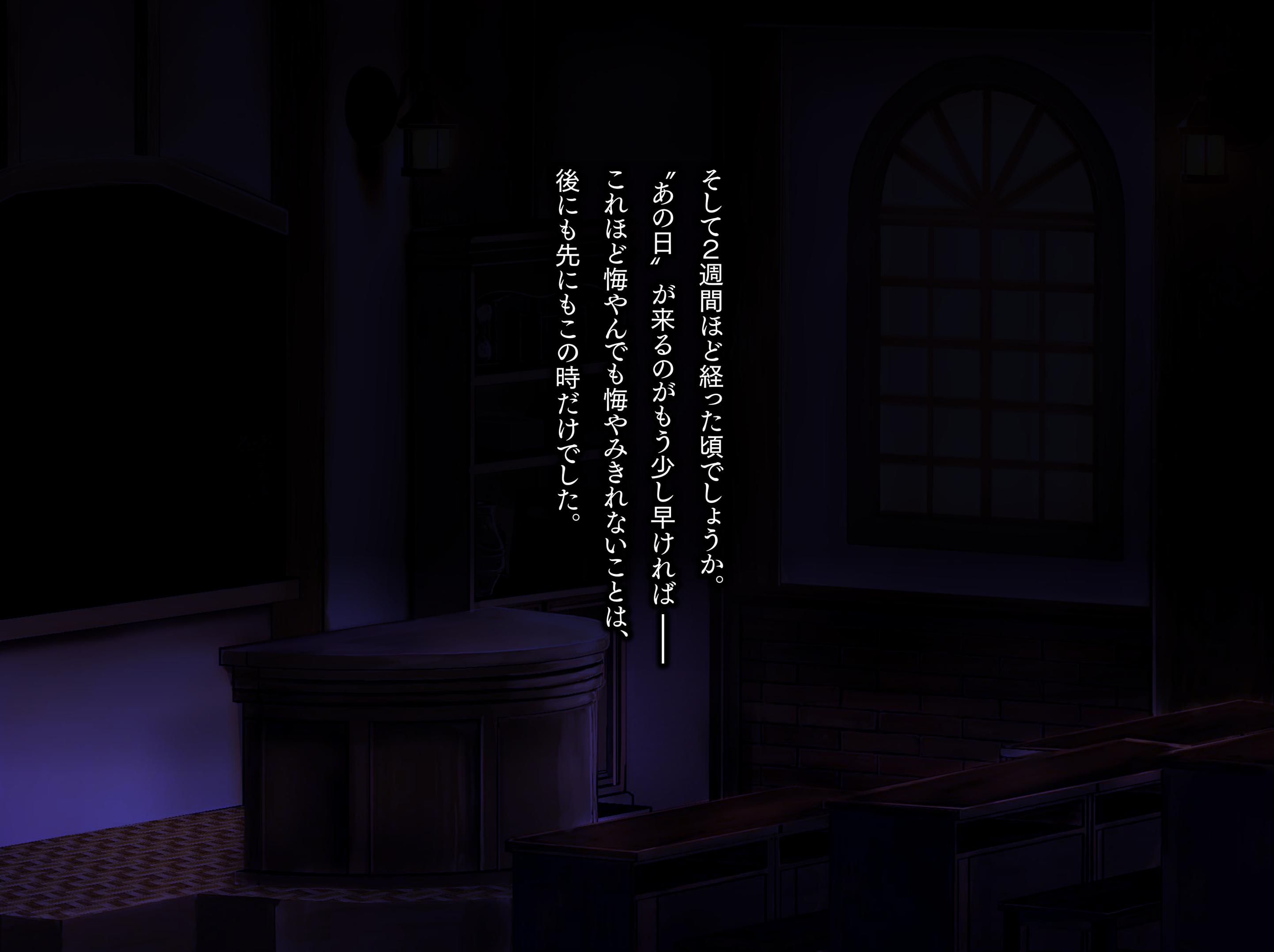
父の会社が抱える従業員全員にも関わることです。

優しい父の声はその時だけは震え

そして、写真が出回らないよう被害を最小限で留める努力
を約束してくれました。

それで良かったのです。

それだけでも私に取っては大きな救いとなりました。



そして2週間ほど経った頃でしょうか。

“あの日”が来るのがもう少し早ければ――
これほど悔やんでも悔やみきれないことは、
後にも先にもこの時だけでした。

「どう言っても…」

「…な、何が…!?!」

その日、授業が終わり早くその空間を離れたかった。
周防ナタリーのいる空間から脱出したかった。
けれど、それは叶わなかったのです。
何が起きたかわかりませんでした。
突然後ろから押し倒されたと思うと乱暴に身包みを剥がされ、
下着も脱がされていました。

「歯向かう気にでもなったかしら?」

「違っ! 違っ!!」

なんの痛みかわかりませんでした。

擦れて

裂けるような

鈍いような

熱いような痛み

中曽根くん!!

中曽根くん……

元柔道部の有望株だった中曽根くん。

かつては爽やかな好青年と言った印象でした。

ですがこの時の彼の目は血走って、そんな面影は一切合切無くなっていたんです。

彼はこの数ヶ月前に万引きが見つかり停学処分を受けていました。

わかっていました。

それも自信満々にこの状況を眺めている一見高潔そうなお嬢様の仕業だって。

大方、私と同じよう周防さんの暇つぶしに使われただけだったのでしょう。

股から響く痛み。

理解するのに掛かった時間はどれくらいだったのか。

今となってはわかりませんが、実はほんの数秒だったのかもしれない。

「私が流した写真、ぜーんぶ消えてるみたいだけど？」

「しっ知らない！」

「やっ

「やだアツ!!」

知らない!!





知ってはいました。

優しいお父さんが電話口でもハッキリ
わかるほどの悔し涙を飲んで
なんとか出してくれた対応策。

私だけでは無い。

会社で抱える従業員も
その家族も守らなくてはならない
お父さんのせめてもの処置。

それが相当に気に食わなかったのでしょう。



「中曾根。 やっっちゃっていいわよ。 好きなように」

「アタシのせいだもんねえ、ごめんねえ。 だからお詫び」

このお嬢様が何を言っているのかわかりませんでした。
いえ、わかりたくありませんでした。

後になって考えれば実に単純な構図で、

このお嬢様の暇つぶしに窃盗を働かされた中曾根くん。

それがバレ、 停学となった償いとして私を差し出した……

中曾根くんはそれを……受け入れた。

もちろん周防さんにとってはただの口実で私への腹いせなのでしょう。

それでも中曾根くんはそれを……

驚きと痛みとそんな考えとが一瞬で混ざり合い、
それは涙となり頬を伝っていました。

「日野、悪いな……でも、どうせ逆らえりゃしないんだ。俺たちは」

ああ……

そうだ。そうですね。

だからそんなにも冷静に、なのに血走った狂った目をしてられる。

「何してるの？」 早くやっちゃって」

さすがに退屈しのぎにはなっているのか、
そこに立つお嬢様の声はいつもよりやや高揚していました。

お嬢様

「ううっ…助け…助けて…」

何人かのクラスメイトが周りを囲って見ていた気がします。
当然わかっていました。この中の誰一人だって助けてくれないこと。

そして、中曽根くんは腰を深く落とし私の中へ完全に入りました。



ああっ……

クッ

ッ





あぁいふふふふふふふふふふ.....



どうしてこんなこと……

はーん
いーん

「はーんいーん……」



「あなたがアタシの『実験』の邪魔をするからでしょう」

心底どうでもいいといった

いつもの口調で返すお嬢様。

実験とは私の裸を撮影した写真を
面白半分で世に流すことでしょう。

そんな、そんなことのために……。

いえ、理由なんてなんでもよかったです。
何度も繰り返しますが、これはあのお嬢
様、周防ナタリーの退屈しのぎの一環で
しかなかったのですから。

「あぁうう……」

涙が止まりませんでした。



「周防さん！ これ、すごいですー！」

目をぎゅうっと瞑り、私の中の感触を確かめるようにゆっくり前後する中曾根くん。それはゆっくり速度を増していき、私は痛みと、如何しようも無い感情に耐えるだけでした。

パツパツ

パツパツ

パツパツ

中曾根くんはもはや欲情のままに私に腰を打ち
付けるだけ。

その姿はもう獣と変わりはなく。

すぽん

すぽん

すぽん

すぽん

すぽん

すぽん

すぽん

かつての爽やかで穏やかだった彼は、そこにはもう……いませんでした。



.....
思えば

「なあ日野。お前大丈夫か？」

その日、周防さんの私へのいじめが始まり幾週間が経った日でした。

その日の放課後、私は机に伏せて泣いていました。

そしていつの間にか疲れから眠ってしまったのです。

出会った時は優しく接してくれていたように見えた周防さんでしたが、

それは見せかけ。あくまでも外向けの対応。

私の父の事業に“周防”の力が必要不可欠、しかも目に見えた成長が見えない昨今。

それを知るや否や周防さんの私への態度は変化していったのです。

最初はものを隠される程度のいたずらから始まり、

次第にエスカレートして行く嫌がらせ。

それに疲れ始めて涙を流した日。

クラスメイトの中曽根くんが心配して声をかけてくれたのです。

授業が終わり、部活動も終了の時間まで眠ってしまったようでした。

「最近、その…周防にいじめられてるんじゃないのか」

この時はそこまで表立ったことはされていないなかつたように思います。

それでも中曽根くんは気にかけてくれて。

クラスメイトはもとより先輩方や先生達からも信頼される、本当に好青年といった言葉

の似合う人でした。

「まっ喋りにくいこともあるよな。でも、何かあるんなら…なっ？」

うまく言葉にできず俯く私に優しい口調で力になるよと言ってくれました。

『でも、どうして？』

—どうして、わかったの？

うまく声にはできませんでしたが、彼はいつもと同じように爽やかに笑い。

「んっ…っ…っ日野のことくらいはなっ」

「誰の力にでもなれるほど器用でもないしな」

しかし、少し上ずった声で。

手を挙げて顔を背け照れるようにまた明日なと教室を出て行きました。

今にしてみれば

わかりやすいくらいの

恥ずかしいアプローチ

……思えば私は、

私も、

彼が、

中曽根くんのが……

「周防さん！」

「気持ち悪い！」

「どうです！！」

「どうして！！」

「これっ！！」

「あっそ、よかったわね。気持ち悪い」



狂った機械のようにひたすらに腰を打ち付けてくる中曾根くん。
進路も、人生も潰され、きつと力の差も見せつけられ……
柔道部も連帯責任と大会出場資格も少なくとも1年間は停止。

ずほっ

中着根く...

やだ...
やめ...

いた...
痛いの...

ずほっ

ずほっ

ずほっ

ずほっ

ずほっ

もう止まってはくれませんでした.....





何を言っても

どうにも泣いても

ま

ま

ま

K

ま

そして、熱さ……

何も聞かない、

全てを失い周防さんとの取引に応じた

中曾根くんは私の中で果てました。

どろぽん

中曾根くん……



中曽根くん以外にも自分で致し、果てたものも居たようでした。
やがて周防さんの号令で皆、その場を後にして行きました。

最後にチラリと振り返り私を見た中曽根くんの目は……
さらなる欲情を映し出していたように思います。

とさくん……

そしてその後、
誰もいなくなった場で私はぐったりと倒れこみ、
その日はいつ、どうやって部屋に戻ったのかを思い出せません。

それからしばらくは、さすがに大きな動きも連続で

起こすわけにはいかないと考えたのか、それともただ

単に少しの退屈しのぎくらいにはなったのか、それは

わかりませんが周防ナタリーもおとなしくしていました。

今にして思えば、私に嫌がらせをするには

最期のチャンスだったというのに……



そして始まる学び舎での復讐

「お前、立場わかっていこなごだるら〜?」

久々の獲物。

理事長
狸親父への引き渡しが先になってしまるのが残念だが、

俺にも……楽しみができそうだ。



続きは本編で!



本編制作中の先行体験版になります。
内容が変更になる場合がございます。
あらかじめご了承ください。